令和五年度　大阪信愛学院高等学校　A日程　入学試験問題

《国　語》

※　解答はすべて解答用紙に記入すること。
※　特に指定のない場合は、字数制限に句読点を含むものとする。

受験番号

一　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

日本が中国から漢字をもらったことをもって、恩恵をうけた、すなわち日本語にとって幸運なことであったと考える人があるが、それもまちがいである。それは、日本語にとって不幸なことであった。

なぜ不幸であったか。

第一に、日本語の発達がとまってしまった。

当時の日本語はまだ幼稚な段階にあった。たとえば、（　ア　）的なものをさすことばはあったが、抽象的なものをさすことばはまだほとんどなかった。個別のものをさすことばはあったが、概括[※1]することばはなかった。

それはこういうことだ。「雨」とか「雪」とか「風」とか、あるいは「あつい」とか「さむい」とかの、目に見え体で感じるものをさす、あるいは身体的な感覚をあらわすことばはある。しかし、「天候」とか「気象」とかの、それらを概括する抽象的なことばはない。われわれはいま、「お天気」ということばを日常にもちいているが、この「天気」という語も本来の日本語ではない。これも、概括的、抽象的なことばなのである。同様に「春」「夏」「秋」「冬」はある。しかしそれらを抽象した「（　イ　）」はない。

あるいは目に見える「そら」はある。しかし万物を主宰[さい]し、運行せしめ、個人と集団の命運をさだめる抽象的な「天」はない。いやこの「天」ともなると、単に抽象的というにとどまらず、この観念を生んだ種族の思想――すなわちものの考えかた、世界と人間とのとらえかた――をノウコウ[a]にふくんでいる。

概念があるからことばがある。逆に言えば、ことばがないということは概念がないということである。理、義、恩、智、学、礼、孝、信、徳、仁、聖、賢……、これらはみな抽象的な概念である。目に見え手でつかめるものではない。これらに相当する日本語はなかった。ということは、そういう概念がなかったということである。

日本語は、みずからのなかにまだ概括的な語や抽象的なものをさす語を持つにいたっていない段階にあった。日本語が自然に育ったならば、そうしたことばもおいおいにできてきたであろう。しかし漢字がはいってきた。――それはとりもなおさず日本語よりもはるかに高い発達段階にある漢語[①]がはいってきたということだ。――ために、それらについては、直接漢語をもちいるようになった。[②]日本語は、みずからのなかにあたらしいことばを生み出してゆく能力をうしなった。

高度な概念をあらわす漢語は、かならずしも人類フヘン[b]のものではない。かならずしも日本人の生活や思想（ものの考えかた）、感情、気分にテキゴウ[c]したものではない。

「（　イ　）」とか「気象」とかは人類フヘンと言ってよいだろう。いわば無色の抽象語である。しかし、「天」はもとより、「理」にせよ「義」にせよ、あるいは「徳」にせよ「賢」にせよ、これらはみな中国人（漢族、支那人）[※2]の生活のなかからうまれてきた抽象的な概念である。支那思想そのものである。日本人は、自分たちの生活や感覚のなかからうまれたものではない、それらの概念をそのままうけいれざるを得なかった。

日本語が漢語の浸蝕[しょく][※3]をうけなければ、「理」や「義」や「徳」や「賢」に相当するような、しかしそれらとはちがった、日本人の抽象概念が日本人の生活のなかからうまれ、またそれらをさすことばがうまれていたであろうが、その可能性が断

たれたのである（概念だけがあってことばがないということはない。その逆もない。概念が生ずることはそれをさすことばができるということであり、ことばができるのは概念がうまれたということである）。

もちろん日本人はその後、これら支那思想そのものである語をもちいて、日本人の思想をあらわすことばをある程度つくってはいる。たとえば「世間の義理」とか「人さまに義理をかいちゃいけねえ」などと言う「義理」は、漢語の「義」と「理」とをくみあわせたものであるが、しかしその「義理」は、漢語の「義」とも「理」とも大いにことなる、あるいはまったく無関係の、日本人の生活からうまれた日本思想である。「仁義をきる」の「仁義」もそうである。あるいは「賢」は、かしこい、りこうだ、ぬけめがない、といった意味にずれた。その意味での「賢」は日本人の生活からうまれた抽象概念である（漢語の「賢」は識見にすぐれ道徳が常人から隔絶して高い意味）。「孝」は――通常「孝行」と「行」の字を附加して――父母をたいせつにする意にずれた。その意味での「孝」は日本人の生活と感情とを反映する日本思想である（漢語の「孝」は男系先祖の祭祀（さいし）をたやさぬこと、および男の子を多数生んで姓の断絶を防止すること）。※4

しかしこうした例は多くないし、漢語をそのままもちいているゆえにその知識からの浸潤、修正をうけやすい。日本人の思想をあらわす日本語は、ないことはないが（たとえば、いさぎよい、けなげ、はたらきもの、等）、とぼしい。特に知的方面にとぼしい。われわれはそれらのほとんどを、中国人の生活からうまれた語にたよらざるを得ない。

第二に、漢字は漢語を書きあらわすためにできた文字である。（　Ⅰ　）、漢語と漢字との関係は理想的にしっくりしている。体にあわせて作った服、あるいは足にあわせて作った靴のようなものだから、しっくりしているのはあたりまえだ。言語とその文字とをひっくるめて考えれば、漢語は、世界のあらゆる言語のなかで最も完璧な、（　ウ　）のうちどころのない言語であろう。多くの言語は、文字体系を持っていても、その文字は借りものなのであるから。

（　Ⅱ　）漢字が理想的な文字であると言っても、それは漢語を書きあらわすために理想的なのであって、それとは性質を異にする、似ても似つかぬ他の言語を書きあらわすには当然不都合である。

それも当然のことであろう。③あなたの体にしっくりあうように作った服は、あなたとは背の高さも、肩幅も胸まわりもお尻の大きさも、手の長さも足の長さもちがう別の人④Aさんには、当然はなはだ着にくい服である。しかしもしこの世に、あなたの体にあわせて作った服しかないとしたら、Aさんはそれを着るほかない。どんなに不便な、窮屈なことだろう。

たとえばこういうことを[d]ソウゾウしてみてください。いまかりに英語が、それを書きあらわす手段を持たなかったとする。

（　Ⅲ　）、この世におよそ文字というものは漢字だけしかなく、そこでどうしても英語を漢字で書きあらわさねばならないとしたら、それはどんなに途方もない、困難きわまることであろうか。ちょっと考えてみてください。

かつて日本でおこったのは、まさしくそういう事態なのであった。

漢語と日本語があまりにかけへだたっていたために、日本語を漢字で書く、ということには、非常に困難と混乱とがともなった。その困難と混乱とは、千数百年後のこんにちまだつづいている。

こんな不便な文字を、なぜ日本人は採用したのか。

（　Ⅳ　）、漢字と同時にアルファベット文字が日本にはいってきていたら、日本人は、考慮のヨチ[e]なくアルファベットを採用していただろう。

しかしその時、日本人にとって、漢字はこの世で唯一の文字だったのである。これ以外に別な文字も有り得る、とは、当時の日本人には思いもよらないことであった。すなわちそれは、「漢字」なのではなく、⑤たった一つの「文字」であったのだ。

（　高島俊男『漢字と日本人』　〈　文春新書　〉）

（注）　※1　概括　…　要点をとらえて、ひとまとめにすること。
※2　支那人　…　中国人のこと。本文中の表記をそのまま使用した。
※3　浸蝕　…　水や風などが物や土地をおかしたり、くずしたりすること。
※4　浸潤　…　思想や勢力がしだいにしみこんでいくこと。

問一　二重傍線部a～eのカタカナを漢字に直しなさい。

問二　空欄アに入れるのに最も適切な二字の語を漢字で答えなさい。

問三　空欄イに入れるのに最も適切な語を次から選び、記号で答えなさい。

ア　時間　　イ　空間　　ウ　季節　　エ　四季　　オ　感覚

問四　空欄Ⅰ～Ⅳに入れるのに最も適切な語を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。

ア　そして　　イ　もし　　ウ　したがって　　エ　つまり　　オ　しかし

問五　傍線部①「漢語」を同じ意味で言い換えた語句を、十五字以内で抜き出しなさい。

問六　傍線部②「日本語は～うしなった」とありますが、その理由を四十字以内で説明しなさい。

問七　傍線部③「あなた」、④「Aさん」はそれぞれ何をたとえていますか。本文中からそれぞれ抜き出して答えなさい。

問八　傍線部⑤「たった一つの『文字』であったのだ」とありますが、この「文字」は何をさしていますか。本文中から十字以内で抜き出して答えなさい。

二　次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

十四歳の夏の初め、ぼくは母と二人で千葉の外房にある海辺の街にやってきた。母は身体が弱い人だった。だから子供の頃の母の思い出は家と病院を数ヵ月おきに往き来する姿で、その度毎にぼくは母に逢いに病院に出かけた。だから病院特有のあの臭いはぼくにとって母の匂いでもあった。

その夏、母は転地療養をすすめられた。仕事に忙しい父のテイアン[a]もあって、ぼくはひと夏母と海辺の街で過ごすことにした。海岸沿いに建っている病院は東京で通っていた病院と違って建物もわりと新しく、①ここなら母も元気になりそうな気がした。何より塾での勉強から解放されたことが嬉しかった。おまけに目の前には大好きな海がひろがっていた。

ぼくは病院の院長先生の自宅に世話になった。白髪頭で六十五歳の院長先生は八十三歳のお母さんと二人暮しだった。モダンなおばあさんでマリコさんと言った。彼女は逢った最初の日に、ガールフレンドはいないの？　といきなり訊いてきて、ぼくが首を横に振ると、あら可哀相、じゃこの夏、ここで見つけるといいわ、とウィンクした。でも数日で、彼女が言うほどの街ではないことがわかった。ここは湘南の海とは違っていたし、原宿や青山のような通りもなかった。

最初は退屈しなかったが、［　A　］があった。大好きな野球ができなかった。できなくともせめてキャッチボールの相手が欲しかった。一人で院長先生の家のブロック塀にむかってボールを投げるのもあきてしまった。

そんな或る日、ぼくはグローブを手に散歩がてら出かけた岬で、空にむかってボールを投げている同じ歳くらいの少年に出逢った。身長も同じくらいでボールを放り投げた投球フォームもまあまあだった。ぼくはしばらく②彼が一人で地球の引力を相手にキャッチボールをしているのを眺めた。時々、背面捕りなんかをして結構楽しんでいるふうだったが、やがて一人遊びにあきたのか、グローブとボールを放って草の上に大の字になってしまった。そりゃそうだろう。ぼくだってカベ[b]を相手に一時間もキャッチボールはできなかった。

ぼくは草の中に転がっていたボールを拾い上げ、寝そべって空を仰いでいた相手の視界の中に入った。

「やあ」

相手は驚いてぼくを見返した。

「キャッチボールをしないか」

ぼくがそう言うと、相手はじっとぼくが手にしたグローブとボールを交互に見てニヤリと笑った。夕暮れまでぼくたちはキャッチボールをした。別れ際に名前を名乗り合った。

「ヨウ」

「レイ」

次の日も、ヨウとその原っぱで逢った。ぼくたちはお互いが恰好(かっこう)のキャッチボールの相手ということを理解し合った。ヨウはぼくにフォークボールの指の握りを教えてくれた。ぼくはヨウが時々暴投するのに気付いていたからコントロールを定める腕の振り方を教えてやった。

三日目、ぼくたちがキャッチボールをしていると山側から一人の少年があらわれた。ヨウがボールを振りかざした手をセ[c]イシしたまま目を丸くして山側を見ていた。そこにパジャマ姿の少年が一人ぽつんと立っていた。真夏の陽差しが照りつける原っぱに少し大き目のパジャマを着て立っている少年の姿はぼくたちには充分衝撃的だった。③おまけに少年の頭髪はまぶしいくらいの金髪だった。

「やあ」

少年が手を上げた。ぼくたちも、やあと口を揃(そろ)えて答えた。ぼくもヨウも少年を見て同じことを考えていた。

④—星の王子さまみたいだ……。

「見学していいかな？」

女の子のような声だった。

「見学って何を？」

ヨウが訊き返すと、君たちのキャッチボールさ、と少年は笑った。ぼくたちも笑ってうなずきキャッチボールを続けた。けど絵本から抜け出たような少年の目が気になって、いつもの調子が出なかった。

「ねえ、前みたいにフライを追ったりゴロを捕って投げるのをやってよ」

「えっ、君どうしてそれを知ってるの？」

ヨウが訊き返すと少年は[d]ハイゴの丘に建つ病院の建物を指さして、ずっと見ていたんだ、と言った。ぼくたちはそれで彼がパジャマを着ている理由がわかった。理由がわかるとぼくもヨウも平気になり、声を出し合ってキャッチボールを続けた。上手くフライを捕ると少年の[e]ハクシュが聞こえて楽しくなった。ヨウが暴投してボールが少年の方に転がった。少年はボールを左手で拾うと、そのままぼくに投げ返した。サウスポーの美しいフォームだった。二人とも感心して少年を見返した。

「ねえ、君も一緒にやらないか」

ぼくが少年にグローブを渡すと彼はパジャマの袖をたくしあげ、器用に右手にグローブをはめてヨウとキャッチボールをはじめた。少年のキャッチボールの方がぼくたちより上手かった。やがて丘の方から女性の声がすると、少年は草の中に隠れるようにした。声が遠ざかると少年が言った。

「明日、この時間に来ていいかな」

ぼくたちが笑ってうなずくと、

「じゃ三角野球をやろうよ。ぼくがバットを持ってくるから。約束だよ」

と拳を突き出した。その拳にぼくたちも拳を重ね合わせた。少年はタクヤと名乗って、⑤おどけた顔をして左手で頭髪を持ち上げた。金髪はカツラだった。ヘッヘヘヘと少年は笑い出し、また明日、と丘にむかって歩き出した。ぼくたちは何度も振りむき手を振るタクヤの姿を見ていた。

「あいつ病院から抜け出したんだな。左手を見たろう。点滴の跡だらけだったものな。ぼくの妹の腕と同じだ。治療で頭の毛が抜けちまったんだ。いいボールを投げてよこすもんな。あいつ、きっといい奴だよ。明日も来てやろうな」

ヨウは逢ったばかりのタクヤを長い間の友人のように言った。ぼくはヨウもタクヤもいい奴だと思った。

（伊集院　静『駅までの道をおしえて』　〈講談社文庫〉）

問一　二重傍線部a～eのカタカナを漢字に直しなさい。

問二　傍線部①「ここ」とは、どこか。本文中から十二字で抜き出しなさい。

問三　空欄Aに入れるのに最も適切な語句を次から選び、記号で答えなさい。

ア　安心　　イ　疑念　　ウ　不満　　エ　緊張

問四　傍線部②「彼が一人で地球の引力を相手にキャッチボールをしている」を言い換えた箇所を本文中から十五字で抜き出しなさい。

問五　傍線部③「ぼくたちには充分衝撃的だった」とあるが、どういうことか。次のア～エから適当なものを選び、記号で答えなさい。

ア　少年の声が女の子のような声だったから。

イ　少年がパジャマ姿で一人ぽつんと立っていたから。

ウ　少年がサウスポーで美しいフォームだったから。

エ　少年がキャッチボールを見学してもいいかと聞いてきたから。

問六　傍線部④「―星の王子さまみたいだ……。」に用いられている表現技法を次から選び、記号で答えなさい。

ア　倒置法　　イ　直喩（明喩）　　ウ　擬人法　　エ　隠喩(暗喩)

問七　傍線部⑤「おどけた顔」とは、どのような顔か。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。

ア　真面目な顔　　イ　ふざけた顔　　ウ　澄ました顔　　エ　とぼけた顔

三　次の古文を読み、後の問いに答えなさい。

南都に、智運房といふ寺僧ありけり。あまりに物騒なりければ、ひた騒ぎの智運房とぞ、人申しける。

ある時に、向かひの僧坊に焼失ありけるに、騒ぎ出でて、手水桶（てうづをけ）の水を捧げて、傍らなる法師の首にかけければ、「①これは※1いかに」と言へば、「御坊（ごぼう）の顔に火のつきたると思ひて」とぞ言ひける。火の光、顔に映りて見えけるを、火のつきたると思ひけるにこそ。

a ある時に、若き者ども寄りあひて、酒宴しけるに、続瓶子（つぎへいじ）せむとて、瓶子を持ちて酒屋へ行きて、程もなく帰りたり。人々興に入りて、瓶子なる酒を提子に入れて見れば、浮き草あり。あやしと思ひて飲みてみれば、水なりけり。「これは②いかに、※4一向に水にてあるは」と問へば、「よも候はじ。やがて③汲みて候ひつるものを」と言ふ。「こは何と言ふことぞ」と問へば、「月はおぼろなり。雨に道すべりて猿沢の池の端にてすべりて、瓶子を池にうちこぼしつるを、④やがて時を移さず、そこを汲み

たりつる」とぞ⑤言ひける。

（『沙石集』より）

（注）※1 首 … 頭。　※2 続瓶子 … 空になった瓶子（とっくり）に酒を満たすこと。
※3 提子 … 注ぎ口のあるなべ。　※4 一向に … まったく。

問一 二重傍線部a「寄りあひて」、b「問へば」の読みを、すべて現代仮名遣いのひらがなで答えなさい。

問二 傍線部①「これ」は何を指していますか。次の文の意味が通るように、それぞれ五字以内で適語を入れなさい。
（ A ）が（ B ）に（ C ）たこと。

問三 傍線部②「いかに」、④「やがて」の意味を次から選び、それぞれ記号で答えなさい。
②「いかに」　ア だれが　イ どこで　ウ どうして　エ 何に
④「やがて」　ア そのまま　イ すぐに　ウ しばらくして　エ そうして

問四 傍線部③「汲みて候ひつる」についての次の問いに、後の語群からそれぞれ記号で答えなさい。
（Ⅰ）智運房が汲んだと思っているものは何か。
（Ⅱ）実際に汲んだものは何か。
ア 酒屋にあった酒　イ 池にこぼした酒　ウ 猿沢の池の水　エ 川の澄んだ水

問五 本文で、智運房はどのような人物だと描かれていますか。最も適切なものを次から選び、記号で答えなさい。
ア 人に対する配慮のできる、気が利く人物。
イ あわて者で、軽率な振る舞いをする人物。
ウ 人に迷惑をかけて喜ぶ、いたずら好きな人物。
エ 失敗をうまくごまかす、言葉上手な人物。

問六 傍線部⑤「とぞ言ひける」の「ける」は本来「けり」となるべきところ、上に「ぞ」があるために「ける」となっているこのような法則を何といいますか。次の空欄に合うように答えなさい。
（　　）の法則

問七 この文章と同じ「説話文学」という文学ジャンルに属する作品を次から選び、記号で答えなさい。
ア 源氏物語　イ 枕草子　ウ 宇治拾遺物語　エ 奥の細道

令和五年度　大阪信愛学院高等学校　入学試験　A日程

《国語》

解答用紙

一

一

a　d

b　e

c

二

三

四

Ⅰ

Ⅱ

Ⅲ

Ⅳ

五

六

七

八

③

④

二

一

a

b

c

d

e

三

四

五

六

七

三

一

a

b

二

A

B

C

三

②

④

四

Ⅰ

Ⅱ

五

六

七

受験番号

得　点

令和五年度　大阪信愛学院高等学校　入学試験　A日程　解答用紙

≪国語≫

受験番号
得点

一　（40点）

一
- a　濃厚
- b　普遍
- c　適合
- d　想像
- e　余地

②×5

二　具体　②

三　ウ　②

四
- Ⅰ　ウ
- Ⅱ　オ
- Ⅲ　ア
- Ⅳ　イ

②×4

五　中国人の生活からうまれた語　④

六　日本語の中にまだ抽象語がない段階で漢語を使用したために、日本語が浸潤されたから。　⑤

七
- ③　漢語
- ④　日本語

③×2

八　書きあらわす手段　③

二　（30点）

一
- a　提案
- b　壁
- c　静止
- d　背後
- e　拍手

②×5

二　海岸沿いに建っている病院　④

三　ウ　③

四　空にむかってボールを投げている　④

五　イ　③

六　イ　③

七　イ　③

三　（30点）

一
- a　よりあいて
- b　とえば

②×2

二
- A　智運房
- B　法師の頭
- C　水をかけ

完　⑤

三
- ②　ウ
- ④　イ

③×2

四
- Ⅰ　イ
- Ⅱ　ウ

③×2

五　イ　③

六　係り結び　③

七　ウ　③